

あかし 灯籠りんご祭の夜

佐野 橙子

「おじいちゃん、灯籠りんごできてる？」

ユリは、おじいちゃんの部屋をのぞいて聞いた。

「ああ、今、紙をはってるところだ。」

「じゃあ、わたしに色をぬらせて。」

「そうしてくれ。だいぶ、疲れたよ。」

明日は、灯籠りんご祭だ。

夏のねぶた祭は有名だけど、この灯籠りんご祭は、あまり知られていない。

おじいちゃんが子どもころは、ねぶた祭も、よくあるような、町内ごとのお祭だったそう。子どもがひとりり持てるくらいのおうぎがたのねぶたや、何人かがかついで運ぶようなねぶたを作って、近所の家々を回っては、ろうそくやらもちやらをねだったものだという。

ねぶた祭が夏のものなら、灯籠りんごまつりは冬のお祭だ。てのひらにのるくらいのもろりんごの形をしたろうそくを作って、近所の家々を回って、見てもらおうのである。

「こっちの方が、ねぶたの昔の形が残ってて、いいな。」と、おじいちゃんは言う。

「ねぶたは、唐の国から伝わって来たんだよ。」

おじいちゃんは、言った。

「トウの国？」

「そうだ。今から千年ほど前に、中国にあった国だよ。唐では、一月十五日に、色々な形のとうろうを家々の軒につるして、灯りの下で、一晩中おどったり、歌ったりして楽しむ祭があったのさ。元宵観燈というそう。」

「ふうん、見てみたいね。」

「そうさな。お前の父さんにも、よくこの話をしたのさ。それが、悪かったのかな……。」

ユリの父さんは、何年も前に旅に出たきりなのだ。

「生きているやら……。」

そう言いかけて、おじいちゃんはあわてたように、「さ、ユリ、色をぬってしまおうか。」

と、立ち上がった。